大谷大学真宗総合研究所

研究所報

No.37　　2000. 3. 28.

目次

情報化社会における大学の研究所　1
1999年度「指定研究」研究組織一覧　2
1999年度「一般研究」選考結果発表　3
1999年度「指定研究」研究目的紹介　4
1999年度「一般研究」研究目的紹介　9
仏教とキリスト教
　浄土真宗とプロテスタント神学　12
彙報　18

情報化社会における大学の研究所

研究所・所長　宮下晴輝

日本の社会のなかで大学が占める位置が大きく変わってきたことで、大学自体もまた新たな機構を取り入れて変わらなければならない状況にある。そのなかで大学の研究機関である研究所は今後どうあるべきなのか。

このことを思うとき、とても大きな示唆を与えてくれたのが、去る1999年の5月に、ドイツのマールブルク大学での「仏教とキリスト教―浄土真宗とプロテスタント神学―」というテーマで開催された第3回ルードルフ・オットー・シンポジウムである。このシンポジウムには、研究所の指定プロジェクト「国際仏教研究」が準備を進め、大学側からは10名あまりが参加した。

シンポジウムのパネルとして設定された諸課題は深刻で重いものであったが、マールブルク大学の神学部の教授たちとの対話は不思議な親密さのなかで進んだ。なにかしら共有しているもの、あるいはそうすべきものが、すでにそこに用意されていたかの感がした。

私個人の思いではあるが、本当にグローバルな時代社会を生きていると感じたのである。かつては互いにまったく伝統の異なった遠くの宗教・文化として意識されていたが、このたびはその異なりをそのままにして、むしろ同時代を生きているという生活感覚のほうが互いの心の優位を占めていたように思う。長くて深い伝統と責任の中にあることを互いに認めあい、しかもそのことを誇りに思い、しかもまた同時代の状況からくる課題の共通性を認識し、それをそれぞれの伝統のなかで担うことの困難さをもまた痛感しあったように思えたのである。

このような出会いにもとづいた研究事業は、たしかに大学付属の研究所として一般化できることではないであろう。まさしく大谷大学の真宗総合研究所であるからこそなし得るし、していかなければならない仕事であり研究である。そうであれば、かえってこれからの真宗総合研究所が目指さなければならないことは、他ではとうていなしえないこのような事業をこそ大事に手がけていかなければならないのであろう。

大谷大学は、社会の急速な国際化と情報化のなかで、新たな教育と研究のための環境を形成するという課題のなかにある。そのためにいま、人文情報学科を創設し、また大学の情報の中核となる総合施設を建設しようとしている。研究所もその中に新たな位置と意義を見つけださなければならない。

真宗総合研究所が、仏教研究のための情報センターとして機能を発揮できるような研究所でなければならないのはいうまでもない。そのためにはまず研究に必須の情報データベースがなければならないし、研究業績や成果のデジタル化は社会的責任でさえある。

2001年には、大学創立の100周年を、また同時に研究所設立の20周年を迎えることになる。状況がかくしからしめる事柄をさらに超えて、大谷大学真宗総合研究所がなさんとし、なし得、なすべきことを、どこに見いだすのか。その中心が見いだされて、はじめて状況のなかでの位置を定めることができよう。時代状況に巻き込まれ、存立の意義が根こそぎ揺さぶり動かされるときにこそ、いよいよ深く先鋭に願いを磨いていかなければならない。

1999(平成11)年度「指定研究」研究組織一覧

研究名	研究課題および研究組織
特定研究 大谷大学近代史研究 代表者 学長・訓覇　曄雄	研究課題　「大谷大学近代100年史の編纂と史料収集」 研究員　武田　武麿（チーフ・教授） 友田　孝興（教授） 門脇　健（助教授） 宮崎　健司（助教授） 一楽　真（専任講師） 宮下　晴輝（所長・助教授） 加来　雄之（主事・助教授） 嘱託研究員　福島　栄寿（光華女子大学真宗文化研究所職員） 堅田　理（本学非常勤講師） 研究補助員　御手洗隆明（博士後期課程満期退学） 狭間　芳樹（博士後期課程３回生） 藤枝　真（博士後期課程２回生）
特定研究 国際仏教研究 代表者 学長・訓覇　曄雄	研究課題　「諸外国における仏教研究の動向と展開の研究」 研究員　安冨　信哉（チーフ・教授） Robert F. Rhodes（助教授） 樋口　章信（助教授） 渡辺　啓真（助教授） 箕浦　恵了（教授） 友田　孝興（教授） 門脇　健（助教授） 木越　康（専任講師） 延塚　知道（教授） 鄭　早苗（助教授） 宮下　晴輝（所長・助教授） 加来　雄之（主事・助教授） 嘱託研究員　寺川　俊昭（名誉教授） 大河内了義（特任教授） 羽田　信生（沼田仏教翻訳研究センター研究員） Alfred Bloom（ハワイ大学名誉教授） Jan Van Bragt（南山大学名誉教授） Mark L. Blum（フロリダ　アトランティック大学教授） 研究補助員　箕浦　暁雄（博士後期課程３回生） 小川　直人（博士後期課程２回生） 黒田　真慈（博士後期課程１回生）
委託研究 真宗史料研究 代表者 学長・訓覇　曄雄	研究課題　「『園林文庫』目録データベースの作成」 研究員　木場　明志（チーフ・教授） 大桑　斉（教授） 草野　顕之（助教授） 嘱託研究員　西田　真因（真宗大谷派教学研究所長） 研究補助員　武田　朋宏（博士後期課程満期退学） 平野　寿則（博士後期課程満期退学） 吉川　邦子（修士課程修了・前大阪狭山池調査事務所嘱託）
委託研究 西蔵文献研究 代表者 学長・訓覇　曄雄	研究課題　「大谷大学所蔵の北京版大蔵経および蔵外文献の研究」 研究員　片野　道雄（チーフ・教授） 小川　一乗（教授） 小谷信千代（教授） 白館　戒雲（教授） 兵藤　一夫（助教授） 嘱託研究員　今枝　由郎（フランス国立科学研究センター主任研究員・本学非常勤講師） 福田　洋一（東洋文庫研究員） S. Hartwell（Multiscript Solutions International, Paris, France） 研究補助員　広浜　哲生（博士後期課程３回生） 櫻井　智浩（博士後期課程３回生） 山田　哲也（博士後期課程２回生）
委託研究 大蔵経学術用語研究 代表者 学長・訓覇　曄雄	研究課題　「『大正新脩大蔵経』経疏部関係典籍における学術用語の研究」 研究員　一色　順心（チーフ・教授） 古田　和弘（教授） 木村　宣彰（教授） 織田　顕祐（助教授） 研究補助員　長沢　円（博士後期課程満期退学） 上羽　敬子（博士後期課程１回生）
委託研究 清沢満之研究 代表者 学長・訓覇　曄雄	研究課題　「全集の編纂と文集の刊行ならびに史料収集」 研究員　神戸　和麿（チーフ・教授） 一楽　真（専任講師） 加来　雄之（主事・助教授） 嘱託研究員　藤原　正寿（真宗大谷派教学研究所所員） 研究補助員　名畑直日児（博士後期課程満期退学） 三浦　統（博士後期課程満期退学）
委託研究 浄土真宗文献研究 代表者 学長・訓覇　曄雄	研究課題　「七祖聖教の編纂に向けての資料収集と検討」 研究員　小野　蓮明（チーフ・教授） 藤嶽　明信（助教授） 加来　雄之（主事・助教授） 嘱託研究員　赤尾　栄慶（京都国立博物館主任研究官・本学非常勤講師） 三木　彰円（助手） 研究補助員　鶴見　晃（博士後期課程３回生） 橋田　尊光（博士後期課程２回生）
委託研究 大谷大学 FD 研究 代表者 学長・訓覇　曄雄	研究課題　「大谷大学における FD のあり方と授業活性化のための方策の研究」 研究員　並木　治（チーフ・教授） 織田　顕祐（助教授） 寺林　脩（助教授） 山本　昌輝（助教授） 加来　雄之（主事・助教授） 嘱託研究員　岡田　伸夫（京都教育大学教育学部教授）

2000(平成12)年3月28日

1999(平成11)年度「一般研究」選考結果発表

(A) 共同研究

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
大内　文雄	研究課題　「唐代仏教石刻文の研究」 研究員　大内　文雄（教授） 河内　昭円（教授） 若槻　俊秀（教授） 浅見直一郎（助教授） 佐藤　義寛（助教授） 織田　顕祐（助教授） 山野　俊郎（専任講師） 浦山あゆみ（専任講師） 嘱託研究員　竺沙　雅章（特任教授） 西尾　賢隆（花園大学教授・本学非常勤講師） 今場　正美（本学非常勤講師） 松浦　典弘（本学非常勤講師）	140万円
片岡　　裕	研究課題　「他言語との混在を可能とするチベット語文字コード作成の研究」 研究員　片岡　　裕（助教授） 宮下　晴輝（助教授） 柴田みゆき（専任講師） 嘱託研究員　江　　荻（社会科学院民族研究所・主任研究員）	190万円
木場　明志	研究課題　「20世紀前半期中国東北地域における宗教の総合的研究」 研究員　木場　明志（教授） 藤島　建樹（教授） 河内　昭円（教授） 桂華　淳祥（助教授） 李　　青（助教授）	190万円

(B) 個人研究

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
米本　義孝	研究課題　「『ダブリンの人びと』研究」 研究員　米本　義孝（教授）	90万円
山本　貴子	研究課題　「司書課程『資料組織演習』における演習用ソフトウェアの開発；授業への利用の可能性」 研究員　山本　貴子（専任講師） 嘱託研究員　小松　泰信（京都精華大学情報館） 高見　昌利（ナウカ㈱京都営業所）	90万円

1999(平成11)年度「指定研究」研究目的紹介

特定研究

大谷大学近代史研究
—大谷大学近代100年史の編纂と史料収集—

教授・チーフ　武田　武麿
(宗教学)

大谷大学は、1901年に東京巣鴨で清沢満之を初代学長とし近代的な大学として開学し、来る2001年には、100周年記念の年を迎える。その記念事業の一つとして大谷大学の近代100年史の編纂が計画され、年来、指定研究の特定研究として研究班が構成され、その実現を目指している。一昨年よりは研究班名を「大谷大学近代史研究」とし、本年度も昨年と同じく、研究課題「大谷大学近代100年史の編纂と史料収集」をかかげ、大学史編纂に向かっている。一昨年それに先立って、写真・図録集『大谷大学100年の歩み』を出版し、内外から注目を集めた。それを受けて、昨年は大学史本編を編纂すべく、資料収集・整理を継続するとともに、大谷大学の変遷に基づく時代区分を検討するなど、本編の編集準備に入った。本年度はさらに具体的な編纂計画に基づき大学史の原稿化を目指すとともに、さらなる資料収集・整理を平行して継続するものである。

具体的には、大学史編纂と資料の収集・整理を大きな柱として研究計画にかかげている。

大学史編纂においては、前年度出版目標を2001年３月末と定め、それより逆算した下記の編纂計画を具体化、実現していく計画である。前半期に大学史の内容および分量を含めた本編の具体的構成を確定し、それに基づく原稿執筆者の選定を行い、後半期に執筆者への原稿依頼、さらに執筆および編集を予定している。

1999年前半：大学史の構成の確定と執筆者の選定
1999年９月：執筆者への原稿依頼
2000年９月：原稿締切
2001年３月：大学史刊行

また上記の大学史編纂がスムーズに進行するために大学史関係資料の収集と整理およびデータベース化が必要不可欠な作業と考えられる。関係資料については、学内の未発掘資料の調査のみならず、以前より継続している学外の関係資料の収集も重要な課題としていきたい。なお資料の収集・整理については、その保存の問題も視野に入れていきたい。

特定研究

国際仏教研究班
—諸外国における仏教研究の動向と展開の研究—

教授・チーフ　安冨　信哉
(真宗学)

本研究は、仏教研究を通しての学術交流を実施することを目的としたものである。これは諸外国における仏教の動向を把握することと、国際社会に浄土教研究を紹介するという、発信と受信の二つの側面からすすめられるものである。

受信については、海外における仏教・浄土教の研究が、近年どのように進められ、現在どのように展開しているかについての調査研究を行い、さらには欧米における仏教研究に関する書誌についてのデジタルベースを構築することを目指す。さらにそれに加えて、海外の仏教学者や宗教学者との研究会の開催や研究員の国際会議への派遣などを通して、現在の仏教研究や宗教状況の把握に努める。

また、発信については、近代の真宗学思想を翻訳することを通してこれらを欧米に紹介したり、積極的な国際学会への参加や国際学会の本学での開催などによって、仏教思想、特に浄土教思想を世界に向けて公開していくことを目的とする。

現代の仏教研究は、欧米社会などにおいてその目的や方法が多様化しており、これらの海外における研究の動向を把握し共有することは、国際的な仏教研究を進めていく上で必要不可欠である。また近年、国際社会において浄土教、とりわけ親鸞の思想への関心が高まってきており、国際社会に浄土教の思想研究と展開を発信し紹介することは日本の精神文化を海外に伝えていく上で重要な意味を持つと思われる。このような状況の中で、仏教研究を通しての国際的な学術交流を継続的に実施し、学界を先導していくことは、本学の果たすべき使命である

と思われる。

今年度はこのような目的に沿って、具体的に以下の研究を進めていくこととする。

①近代教学翻訳研究。大谷派近代教学を代表する四人（清沢満之、曽我量深、金子大栄、安田理深）の代表的論述を翻訳し、出版にむけて準備を進める。

②ルードルフ・オットー・シンポジウム研究。1999年5月にドイツのマールブルクにおいて開催される福音神学と真宗とのシンポジウムに向けての基礎研究。ならびにシンポジウムへの参加。

③日韓仏教信仰比較研究。韓国の東国大学との浄土思想を中心とした共同研究の推進。

④英訳蓮如論集出版に向けての基礎作業。

⑤学術会議等への研究員の派遣。

⑥基礎研究、その他。仏教研究に関する書誌についてのデジタルベース化や、構築される情報の公開。

委託研究

真宗史料研究
—『園林文庫』目録データベースの作成—

代表者　木場　明志
（国史学）

真宗大谷派による「宗門の近代史の徹底した検証を行い、それによって宗門の将来展望を誤りなく開く方途を確立する必要」があるとの課題を重く受けとめ、その課題に沿って本学に委託中の『園林文庫』整理作業を終わらせ、さらに最終目標である同文庫史料の目録データベースを完成させる。年度末にはそれらの成果の全てを報告し、もって本研究班への長年の期待に応えたい。これによって、大部の宗門近代史料の全容が初めて明らかになることであろう。

『園林文庫』史料整理作業は1991年度から8年を費やしてきた。本年度はその最終年度である。史料整理作業は昨年度までに旧目録点数の91.83％（収納箱数では82.42％）にまで進んでおり、昨年度において年間整理点数において過去最高に及ぶことができたことを受けて、本年度は一気に整理完了を目指して作業を促進する。うち8箱分は燃え残りなど整理不能史料であり、それを除けば整理完了は十分可能であろうと思う。特に本年度は、史料整理作業の根幹である調査カードの作成について、古文書読解に優れた能力を有するOBを研究補助員に加え、9月末を目途に作業を終えるよう努力する。その後、別置などの理由で『園林文庫』から離れて保管されていた2箱分の史料についても同様の作業を行い、以上で調査作業を終了する。

10月以降は調査カードに基づく『園林文庫』史料総合目録にあたる目録データベースの作成作業に全力を上げる。この作業についてもOB研究補助員を得たので年度末の作業終結が見込めるようになった。目録データベース作成については、その様式などについて若干の試行錯誤による手直しを必要とする状況ではあるが、研究員・研究補助員・アルバイト員の研究スタッフの総力を結集し、当該研究の年度末における全作業完了に向けて努力していきたい。

完成した目録データベースは、OMを用いて報告する予定にしており、旧目録で5,312点であった『園林文庫』史料は、このたびの作業によって約40,000点の史料として改めて報告されることになり、あわせて多くの内容項目による検索も可能となるはずである。

委託研究

西蔵文献研究
—大谷大学所蔵の北京版大蔵経および蔵外文献の研究—

教授・チーフ　片野　道雄
（仏教学）

本研究は、大谷大学図書館が所蔵するチベット語文献を整理・研究するとともに、所蔵されているものの中、貴重な文献を内外に紹介することを目的としたものである。そのために、これまで北京版西蔵大蔵経の勘同目録の編纂・出版、および本学の蔵外チベット語文献中に含まれる稀覯本の研究とその影印出版を行ってきた。勘同目録に関しては、本年度をもって念願の丹殊爾の最終冊（Ⅱ—3）が出版される。

また、将来のチベット語文献の電子データ化を想定して、1993年度よりパーソナルコンピュータ・マッキントッシュ用のチベット語システムを開発することに着手した。当該の開発は、フランス国立科学研究センターや東洋文庫など学外からの協力を得て、Tibetan Language Kit

for Macintosh として結実した。そのため、現在、パーソナルコンピュータ・マッキントッシュにおいてチベット語を使用することが可能な状況になっている。ただ、マッキントッシュ OS のヴァージョンアップに合わせて当該チベット語システムのヴァージョンアップが求められているため、今後も引き続いて開発作業の続行が求められている。

それとともに、Tibetan Language Kit for Macintosh を利用して本学所蔵のチベット語文献の電子データ化にも取り組むことが必要である。これまでに西蔵文献目録や一部重要な文献の入力を終え、利用できる状態にある。現在、北京版西蔵大蔵経の総目録の電子化を進めている。今後、文献入力も併行させながら所蔵文献全体の電子データ化を推進していく。

委託研究

大蔵経学術用語研究
—『大正新脩大蔵経』経疏部関係典籍における学術用語の研究—

教授・チーフ　一色　順心
（仏教学）

『大正新脩大蔵経』全100巻は、漢訳の経律論を収める最も完備した大蔵経である。この人類の貴重な知的文化遺産である、『大正新脩大蔵経』を全世界に開放するために、仏教系6大学（大谷・龍谷・高野山・駒沢・大正・立正）は「大蔵経学術用語研究会」を組織し、分担して『大正新脩大蔵経』所収典籍の学術用語を研究して『大正新脩大蔵経索引』を完成した。こうした努力によって仏教研究はめざましく発展し、索引自身は現在の視点から見ると多少の訂正を加える必要が生じた。本研究は、このような要請に基づき、本学がかつて責任編集した「経疏部索引」を見直して、改訂版の出版に備えることを目的としている。この研究の成果によって『大正新脩大蔵経』がより利用しやすいものとなり、関係各分野の研究の発展に寄与するものであると確信する。

この作業と並行して、『大正新脩大蔵経』を広く、一般学生や初歩の研究者に開放するために、基本的な典籍に関するコンパクトな解題辞典の編集を進めている。これも六大学で作業を分担し近日中に公刊予定である。仏典の解題辞典はいくつかのものが公刊されているが、本研究は初学者に焦点を当てて、必要最小限の情報を提供しようとするところにその特色がある。

さらに、現下の国際化・情報化の進展に対応して、『大正新脩大蔵経』をより広く開放するためには、大蔵経のデータベース化は不可欠である。『大正新脩大蔵経』に収められた諸典籍は、世界の文字文化の中でも最も複雑で高度なものであるところの漢字によって成り立っている。従って現状の大蔵経の電子化には、文字をめぐるいくつかの困難な問題がある。現行の大蔵経の電子化をめざすのか、それとも新しいものを創造すると考えるべきなのか。かつて仏教がインドに起こって中国に受容されたときと同じような質をもった問題がここにあると言える。この点については、東アジアのいくつかのところで作業が進められており、研究成果が公開されているが、全ての問題を消化しているわけではない。本研究班は、日本において既に『大正新脩大蔵経』の印度撰述部のデータベース化を行っている東京大学印度哲学研究室と密接な連携を保ちながらテキストデータベース化の作業を進めている。これは、重複を避けるためと問題点を共有するためである。

具体的には、中国撰述の諸宗部と史伝部に収録された典籍のテキストデータベース化を完成し、公開することを目的としている。

委託研究

清沢満之研究
—全集の編纂と文集の刊行ならびに史料収集—

教授・チーフ　神戸　和麿
（真宗学）

大谷大学は2001年に近代化100年を迎える。これは、大谷大学の建学の志願を改めて確認する大切な機会である。と同時に、建学の精神を学内だけにとどめるのではなく、社会一般に広く知らせていく機縁ともするべきであると思われる。

このような課題に応えるためには、本学の学祖である清沢満之の思想研究は是非ともなされなくてはならない根本課題だと考えられる。また清沢満之研究のための基礎資料そのものの研究を通して、研究資料作成の方策についても検討を行う必要がある。

これまでも真総研の一般研究において、真宗学科が中心となって、清沢満之の基礎資料について共同研究がなされてきた。その中で、従来公刊された全集や文集などについての検討が加えられてきたことである。

本研究はそれらの成果も継承しながら、大学指定のショート・ターム・プロジェクトとして、清沢の基礎資料刊行に向けての研究である。一つには、さまざまな角度からの研究にたえうる学術的価値の高い『清沢満之全集』の刊行について。二つには、多くの人々に清沢の基本的思索を紹介するための『清沢満之文集』の刊行について。これらの内容や編纂形式についての案を提示することを主たる目的としている。

一年間という限られた研究期間であるので、『全集』『文集』の編纂を視野に入れながら、編纂形式についての案が見えるようにするために、清沢の文章のいくつかをを、シリーズ『清沢満之集』として作成したい。本年度内には、『精神界』や『宗教哲学骸骨』など、過去に出版されたものについての刊行を実現したい。

また同時に、清沢満之の自坊である西方寺に残された清沢満之関係の貴重な史料について調査研究ならびに史料のデジタル画像によるデータベース化などの作業を行う予定である。この史料研究については、同じく指定研究である「大谷大学近代史研究」と有機的な関係をもちながら作業を進めていきたい。

委託研究

浄土真宗文献研究
—七祖聖教の編纂に向けての資料収集と検討—

教授・チーフ　小野　蓮明
(真宗学)

本研究は、来る2001年の大谷大学開学100周年および2011年の宗祖親鸞聖人750回忌を視野におき、浄土真宗を研究する上で不可欠である七祖聖教ならびに親鸞の真蹟の公開に向けての資料収集と文献研究を行うことを目的とする。

浄土真宗を研究する上で、七祖聖教は極めて重要な位置をもつ。しかし大谷派においては定本的依用本とすべき七祖聖教がない状況であった。それゆえに、七祖聖教の編纂・公開は、長年にわたって待望され続けてきたことであり、またその間に大谷大学において編纂の試みもなかったわけではない。しかし、多くの困難に直面するなか、実現に至っていないのが現状であった。

そこで、蓮如上人500回忌を契機として発足した「蓮如研究プロジェクト」の事業の一つとして、「定本『七祖聖教』」の編集が試みられたのである。この事業の中で宗祖の750回忌をも展望しながら、大谷派の教学・学習の基本的聖教となるものを目指して、基礎的研究が開始された。そこではかって大谷派で広く依用されていた南條神興本をもとに底本の確定について種種の観点から検討が進められたのである。しかし、幾つかの問題点が見出され、底本の確定までには至らなかった。

そのような経過の中、今回の「指定研究・委託研究」「浄土真宗文献研究」は、「蓮如研究プロジェクト」の基礎研究の成果を継承しつつ、七祖聖教編纂を目指して新たに編成された。具体的には、善導の五部九巻について「宗祖加点本」によるテキスト作成の基礎作業と検討作業を平行して行っていくことを通して、聖教編纂上の具体的作業手順の明確化と問題点の検討を進めている。

また、親鸞の真蹟の保存・公開のための情報収集と検討も目指しているが、そのなかでは、真蹟のデジタル化ということも視野に入れて進めていきたい。

委託研究

大谷大学FD研究
—大谷大学におけるFDのあり方と授業活性化のための方策の研究—

教授・チーフ　並木　　治
(フランス文学)

大学を取り巻くさまざまな状況の変化、とりわけ学生の知的関心の多様化につれて、大学教育のあり方に根本的な再検討が迫られるようになって久しいが、とりわけ受験生全入時代をも間近に控えた危機的状況のなかでは、大学の学問的伝統を維持し展開させる上でも、今日の新たな状況に的確、かつ積極的に取り組むことは、まさに焦眉の急の問題である。また、最近の学生アンケートによっても、授業が必ずしも「多様化」した学生の期待に十分応える魅力あるものとなっていないことが明らかになっている。学生の知的関心や能力を効果的に引き出しうる授業内容や進め方が必要となっており、授業に

一層の工夫をこらし、魅力ある授業を展開できるかどうか、ひいては大学全体としての知的活力を高められるかどうかは、今後の大谷大学の命運を基本的に決する問題であると言っても過言ではないであろう。

今日、大学教育には、新たな時代のニーズや多様化した学生の実態と能力をふまえての教育の質的向上が求められている。本学では従来、授業改善や授業活性化の工夫は、それぞれの授業担当者に委ねられ、自由な創意工夫によって本学ならではの内実豊かな教育が実現されてきた部分は大いに評価されるべきであるが、しかし一方で、教職員の一致協力した大学全体としての調査研究に欠けていたことから、授業内容の専門性維持のための努力と成果に比して、授業活性化への取り組みが立ち遅れてきた感は否めない。

本研究では、ひろくさまざまな視点から授業のあり方を見直し議論することから始め、単に教育技術論や教育環境論に終始するだけでなく、問題を広く、こころの問題・コミュニケーションの問題として捉えている。それぞれの学生の資質に応じた達成感、心の触れ合いの中での学びの満足感、ひいては、学びの自信とコミュニケーション能力を獲得させる教育の実現こそ、とりわけ豊かな人間性の育成を使命とする本学にあってきわめて重要である、との見地にたつものである。

より具体的には、学生の興味やニーズに繋がる身近な問題を積極的に取り込んだ授業、問題発見・解決能力、いわば真の情報処理能力を高めるための創意工夫、主体的に学ぼうとする意欲をかき立てるような学生参加型授業方法とそのための環境について研究を進め、授業活性化のための具体的方策を考えている。

1999(平成11)年度「一般研究」研究目的紹介

共同研究

唐代仏教石刻文の研究

研究代表者　大内　文雄
(東洋史学)

ここにいう唐代仏教石刻文とは、唐代仏教の実態を今に伝える同時代資料を指している。文字によって記録された厖大な資料群の中において、石刻資料が重要な位置を占めていることはいうまでもないが、中でも仏教に関わる石刻資料は、錯綜する唐代仏教の実態を研究解明する上に高い価値を有している。しかし従来、こうした碑刻文の利用は書道史の上において行われるか、あるいは仏教史研究においても限られた部分に終始していた嫌いがある。唐代仏教石刻文の研究班は、昨年度に発足し、本年度もその組織や研究形態を引き続き維持していくものである。碑文の内容をさほど重視しない書道史上の研究や往々にして断片的な研究利用が行われてきた歴史研究の従来のあり方に鑑みるとき、史学、文学、そして仏教学の専門研究者による、正確な注釈を伴う解読作業を主体とする共同研究は、数多の唐代仏教石刻文の全体像を把握する有効な方法の一つであるばかりでなく、班員相互に共通の認識をもたらす有用な研究方法である。

研究組織の分担者は13名であるが、本年度は、その他にも本学の内外からの参加者が増える見込みであり、全体で20名前後になると思われる。こうした研究者によって、昨年度はおよそ13種の、塔銘や碑銘の中でも比較的短文の、僧・尼の個々に関わる石刻資料を中心として、毎週の解読を進めてきた。本年度は、仏教石刻資料の主要な柱の一つである寺碑を含む、長文の碑文を解読することを中心課題に据えていく予定である。いずれも原拓本あるいは写真を主とし、金石書などに掲載されている釈文を随時に参照しながらの作業となることは、昨年度と同様である。本年度に解読の対象とする予定の碑文は以下のとおり。

摂山棲霞寺明徴君碑、等慈寺碑、大智禅師碑並碑陰記、道徳寺碑、隆闡法師碑、麓山寺碑、玄奘塔銘、基公塔銘、楚金禅師碑、不空和尚碑、大達法師玄秘塔碑、

以上の碑文はいずれも仏教史研究上に重要な、また書道史上に著名な名碑である。中には道徳寺碑のような新出のものも含まれているが、これらには、およそよく知られているに比して、綿密な解読がなされているとは言い難いものが多い。唐代仏教石刻文の全貌を知るには余りに少ない数とはいえ、これらを共同研究の俎上にのせることによって、そこに向かっての着実な基礎的作業を進め得ると考えている。

共同研究

他言語との混在を可能とするチベット語文字コード作成の研究

研究代表者　片岡　　裕
(情報学)

チベット文字文書は、経典等において他の言語由来の単語を記述しており、さらに、チベット文字は、元朝時代に作成された国際音表文字としての役割を担ったパスパ文字や、縦書きのチベット文字であるソヨンボ文字の起源であって、宗教的重要性はもとより言語的・民俗学的・歴史的に極めて重要な位置を占めている。しかし、チベット文字でチベット語以外のサンスクリット語などの言語をも記述し、本学所有の「北京版大蔵経」などのチベット文字標準文献の参照が困難なため、その文字コード化が遅滞しており、学術研究やデジタル・テキストによる情報伝達において大きな障害となっている。

チベット文字は、構造が複雑なため、既存の国家または国際規格に提案されたチベット文字コードでは、正しい文字図形表示にも至っておらず、国際的に使用可能なチベット文字コードを作成しなければ、図書館での情報検索も不可能である。従って、国家及び国際規格として通用し、種々の目的で使用可能なチベット文字コードの作成が急務である。チベット文字は結合音節文字であるため、多言語を記述したチベット文字文書を調査し、使用されているチベット文字の音韻及び文字構造を求め、文字を構成する記号群を明らかにする研究を行い、他の言語の文字コード、特にデーバナーガリ文字（サンスクリット語）などとの無矛盾の混用テキストの記述を可能

とするチベット文字コードの作成が、本研究の目的である。本研究は、社会科学院民族研究所の現代チベット語音韻文法構造研究者と共に、本学での文字文献データ研究を加え、上記の機能を持つ文字コードの研究と作成を行う。

特に、標準チベット文字文書資料が必須であり、標準資料として「北京版大蔵経」が最適であるが、貴重書であり閲覧が困難であり、資料として共有化できなかった(写真縮小印刷の影印版は絶版)。そのため「北京版大蔵経」をデジタル画像データとして共有可能の一次資料とする。この資料は、コード化の基礎となるばかりでなくデジタル図書館の資料としても活用可能である。

共同研究

20世紀前半期中国東北地域における宗教の総合的研究

研究代表者　木場　明志
(国史学)

中国東北地域（満州地域）には、20世紀前半期に多くの日本人が居住することがあった。またそこには、日本が「満州国」を置いて植民地支配を行ったという日中両国にとって不幸な歴史もあった。当該地域には、20世紀前半期において、居住日本人を主たる対象とする日本宗教の布教も盛んになされた経緯があったが、1945年の日本敗戦とそれに続く日本人撤退の後、当該時期の宗教情況についての研究はまったくなされてこなかった。

ところが、近時、歴史学研究では、中国東北地域（満州地域）における日本神社の研究、日本新宗教（天理教中心）の研究など、また文学研究では、中国東北地域文学（満州文学）の研究が行われはじめ、いずれも学術研究国際化の方向に合致して注目に値する成果を築きつつある現状である。本学もまた研究の国際化を目指す見地に立つ折りから、本共同研究は、仏教を中心とする当該時期当該地域における宗教についての総合的な研究に着手しようとするものである。

上記目的に沿って、本年度内において、中国東北地域（満州地域）関係宗教資料の蒐集と整理を進め、『満蒙』をはじめとする本学図書館所蔵の基本年次資料を調査し、本学において揃わない年次分は本学提携校である中国東北師範大学図書館所蔵本によって補うなど、東北師範大学との共同研究推進合意を踏まえ、本学における中国東北地域研究の基盤整備を図る。一方、国内研究者との連携・交流を通じた研究の深化と拡がりを求めて外来講師を招いた共同研究会を逐次的に開催し、日本仏教のアジア布教が帝国主義的国策追随に終始したとする、ともすれば硬直化しがちな研究視座そのものを見直し、より広く近代日本の他民族支配という視野から、あるいはハワイ・北米・南米布教をも通じた海外布教の視野から、改めて中国東北地域での布教を位置づけるという作業も進めていきたい。

総合的研究であることは、単に日本仏教の布教動向というにとどまらず、日本の宗教全般をはじめ、中国東北部の地域仏教（中国仏教）、民俗宗教、ラマ教、回教、の様相についても研究するということであって、中国東北師範大学の研究者を招いての共同研究会を開催し、中国東北地域宗教研究の現状や研究最前線の報告を聞いて交流を図り、特に中国仏教界の当該時期の動向、および民族宗教と仏教との習合関係、などについて中国研究者から多くの教示を得るようにしていきたい。それは、提携関係にある両校の研究交流に資することでもあるが、大きな目標は、本学教員を中核とする本格的研究組織を立上げ、もって国内・国外の研究者を組織した新しい研究推進基盤を構築することにある。

個人研究

『ダブリンの人びと』研究

研究代表者　米本　義孝
(英文学)

20世紀を代表する作家の一人ジェイムズ・ジョイス(1882－1941）の作品は、日本では『ユリシーズ』(1922)や『フィネガンズ・ウェイク』(1939）ばかりに集中して研究されている。私の場合は、学校を卒業して大学の教員になった時から、ジョイスの初期の短編集『ダブリンの人びと』(1914）に興味をもち、ほそぼそと勉強してきた。そして、今から約20年ほど前、恩師の依頼で『ダブリンの人びと』全15編中の８編を選んで、大学用テキストとして２冊上梓したのを期にして、本格的な研究に

励み、この短編集を配列順でなく、作者の創作順に研究して、1年に1編を目標にして論文を書くことにしてきた。私のこの作品への研究・独創性としては、作品の内容面だけでなく形式面に注目し、言語・文体に徹底的にこだわって作品分析をしたことと、作品のもつリアリズムを浮き彫りにしたことであり、その両者を結びつけて論文作成するのを心がけたことである。研究の完成が予定よりはるかに遅れたのは、なによりも私の仕事が遅いことと怠惰とに原因があるのだが、もう一つの原因は言語・文体などの形式の面からの独自の研究が私には難しかったからである。しかし、やっとあと1年強ぐらいで完成する見通しがでてきた。これからは、これまでに書き溜めてきた諸論文を、ここ数年間に英米で次々と出版されてきた『ダブリンの人びと』の研究書を読み返しながら、研究書としての体裁を整えたり足りない部分を補ったりすることに全力をあげたい。

わたしの研究のもう一つの独自性として、作品にあらわれた地名に意義を見出すことである。『ダブリンの人びと』の特徴として、その主人公たちが市内を四方八方によく歩きまわることがあげられる。ジョイスの意図が都市ダブリンそのものを描くことでもあり、そのためには主人公たちに市内の方々を歩かせる必要があった。『ダブリンの人びと』のリアリズムは徹底しており、読者が地図を手元に置けば、登場人物が街中を歩きまわる道順をたどることができるようになっている。私も各編の主人公たちが歩いたとおりに歩き、私の論文に欠けている地名そのものの意義をつかみ、それをぜひ論文に加えたいと思っている。

個人研究

司書課程『資料組織演習』における演習用ソフトウェアの開発；授業への利用の可能性

研究代表者　山本　貴子
（図書館学）

1996年8月に公示された図書館法施行規則の一部改正により、司書および司書補の講習において履修する必要のある科目とそれぞれの単位数が決定された。この新カリキュラムは、司書講習用として規定されているに過ぎないが、実質的には、多くの大学での司書課程におけるカリキュラムとして運用されており、本学でも、1997年4月から、この新カリキュラムに準拠した授業が開始されている。

以前のカリキュラムは、1963年3月に改定されたものであり、その内容では現実に即していないというのが今回改正された理由であった。そのため、この新カリキュラムには、「情報機器論」、「情報検索演習」など、現代の情報化社会に対応した科目が多数含まれている。

一方、司書課程では、資料組織法の基礎を理解することが不可欠であり、そのためには、目録法、分類法の演習が重要な役割を担っている。これらの演習は、従来、カード目録の作成や手作業での分類の付与が大半を占めていた。しかし、現在、図書館では、目録や分類の作業についてはコンピュータを使用したデータのダウンロードやオリジナル入力、アップロードが中心となっている。従って、これらの科目でもコンピュータを利用した教育を行う必要がある。

しかしながら、各大学における新カリキュラムへの移行は、1998年3月に完了したばかりであり、教育環境はいまだ整っていない。新カリキュラムに対応した教科書の中にはまだ出版されていないものもあり、各演習に必要なツールの開発に至っては、ほとんど手がつけられていない状況である。

そこで、本研究では、コンピュータを利用した資料組織法の演習ツールを構築することを目的とする。当ツールは、目録データのダウンロードとアップロード、およびオリジナル入力についての教育ができる図書館の目録システムとする。その際、現代の国際化に対応させるべく、国際的にも通用するデータの作成ができるシステムをめざす。さらに、そのツールが大谷大学の授業に使用できるかどうかの可能性を探る。

1999年5月5日～10日
「第三回ルードルフ・オットー・国際シンポジウム」聴講レポート

仏教とキリスト教　浄土真宗とプロテスタント神学

エスベン・アンドレアッセン

ドイツの中心部に位置し、ヨーロッパでもっとも古いプロテスタントの大学、マールブルクのフィリップス大学（以下は一般的な呼称であるマールブルク大学を用いる）において、「仏教とキリスト教—浄土真宗とプロテスタント神学」と題する第三回ルードルフ・オットー・国際シンポジウムがマールブルク大学プロテスタント神学部の主催・大谷大学の協力によって行われ、私はその聴講生となるというすばらしい機会を得た。

このシンポジウムは、きわめて質の高い多くの研究発表論文によって構成されていた。しかも、これらの論文は、事前に日本語とドイツ語（もしくは英語）で交換されていたのである。これらの研究発表については後ほど詳しく触れるであろう。

シンポジウムは実に周到に計画された。特に大河内了義教授の訳による『日独対訳　唯信鈔文意』と、安冨信哉教授編集、マーク・L・ブラム教授とヤン・ヴァン・ブラフト教授の英訳による「二人の近代真宗学者：清沢満之と曽我量深」のアンソロジーが提供された。

また真宗の視覚的印象に寄与する二つのプログラムが用意された。一つは、親鸞の肖像が描かれた巻物や親鸞の真筆である多くの有名な原稿などの選び抜かれた品々の展示である。特筆に値するもう一つのプログラムは、メイン・ホールにおける「勤行」（読経）であり、これによってヨーロッパの神学者たちは、日本人の研究者たちが、ただ単に学者であるばかりでなく、真宗に身を捧げた熱心な僧侶であることを知ったのである。

シンポジウムの聴講生たちは実に熱心に耳を傾け、興味をもった。大学院生以外にも、この大学都市に在住するかなりの数の知識人たちが男女を問わず聴衆として参加していた。これらの聴衆が会場につめかけたことは、シンポジウムにふさわしい厳粛さを与えるのに役立っていた。ヨーロッパでの会合の場所としてマールブルクが選ばれたことは、ヨーロッパの教会史のなかでマールブルクが中心的役割を果たしてきたという理由からしても非常に意義深いというだけでなく、明晰さと新たな活気をもって仏教の理念に触れた聴衆が多くいたにちがいないという点で、東方の仏教にとってもたいへん重要であったと私には思われる。

*

シンポジウムは5月6日木曜日に始まった。開会にあたっては、マールブルク大学神学部長のディートリッヒ・シュトルベルク教授と大谷大学学長訓覇曄雄教授、およびルードルフ・オットー・シンポジウムの責任者であるマールブルク大学のハンス＝マルチン・バールト教授の挨拶があった。バールト教授は、はじめに準備にあたった二つの大学の同僚たちが見せた勤勉さと善意を賞賛した。また彼は、シンポジウムにその名を冠しているルードルフ・オットーが今回のシンポジウムの理念とその努力の成果に喜んでいるにちがいないと語った。多くの話し手の先頭を飾る一人として、バールト教授は浄土真宗とプロテスタントの間にある明らかな類似性に焦点を当て、両者の相違についてもまた、シンポジウムの中で吟味されることになると述べた。

（ルードルフ・オットー（1869-1937）は、1917年からマールブルク大学の教授になり、キリスト教以外の宗教を研究するため東方をたびたび旅し、宗教を新しい仕方で定義した。彼の最も有名な研究書『聖なるもの』（1917）の中で、彼は宗教経験を、畏怖、歓喜および至福を抱かせる「ヌーミナス」なもの、恐ろしくしかも魅惑的で神秘的なもの、非合理的だが客観的な感覚として記述した。）

開会を飾る講義は、このシンポジウムの発起人である二人の人物によって行われた。最初の研究発表はマールブルク大学のミヒャエル・パイ教授によって提示された。日本語、ドイツ語、英語の語学力を備えた仲介者としての彼の能力は、すべての参加者から認められ賞賛された。彼の研究発表講義のタイトルは「仏教とキリスト教の対話の歴史と諸問題」というもので、彼ははじめに、浄土真宗とキリスト教が実際に最初に出会ったのは、カラコルムのモンゴル王の宮廷においてであり、それは一般に知られているよりも早い時期のものであることを指摘した。引き続き両宗教の出会いの歴史を簡略に紹介した後、パイ教授はさらなる研究課題として「願」「慈悲」「智慧」といった鍵概念を一つひとつ取り出した。パイ教

授によれば、特に浄土真宗の祖師の一人である龍樹の思想が比較研究の中心となっている。またパイ教授は、「両宗教の救済のあり方における驚くべき構造的類似性はよく知られている。しかし、両宗教とも非神話化を行っているにもかかわらず、両者の形而上学上の相違についてはあまり知られていない」と述べて、研究発表を締めくくるに当たって、両宗教に有益な課題として解釈学上の共同プロジェクトを提案した。

大谷大学の箕浦恵了教授が次の発表者であった。研究発表のタイトルは、「仏教とキリスト教の対話の可能性について」というもので、キルケゴールの『死に至る病』の中でのソクラテスに関する言葉を引用しながら、このシンポジウムのことをソクラテス精神の実験であると語った。そして彼は対話 dialogue と弁証法 dialectics の異なりを強調した。つまり、弁証法的手続きによって何らかの総合的な新しい神学に到達しても、そのようなものはほとんど何の役にも立たないとするのである。彼はそれから、言語哲学に関する論説に進み、ガーダマーの『真理と方法』を参照しながら、言語はコミュニケーションの障害であるとともに我々の持つ唯一のコミュニケーションの手段でもあることを強調した。箕浦教授によって紹介された「格子基盤 grid としての言語」(ポール・セラン) という観念はシンポジウムの中で何度も登場して、パイ教授が述べたように、解釈学の問題がすぐに参加者の中心的問題となった。浄土真宗とプロテスタントのどちらの宗教にも、「神の言葉」とか「名号」という概念が特別な位置を占めており、箕浦教授はこのことを親鸞の『歎異抄』と『唯信鈔文意』およびルードルフ・ブルトマンの『信仰と理解』からの引用で立証した。

*

初日の夜、「信仰のみ Sola Fide—念仏」という二重の概念についてマールブルク大学のハンス＝マルチン・バルト教授と、大谷大学の木越康教授が講義を行った。司会はミヒャエル・パイ教授であった。

ハンス＝マルチン・バールト教授は、講義の最初に、「ただ信仰のみを通じて」つまり唯信 sola fide ということが、現実としては存在していないにも関わらず、プロテスタントの中心であると述べた。この概念は「相互依存性 interdependency」において知覚されなければならず、そこには「どこから」ということと「どこへ」ということがある。信仰は神の御業のはたらき function of the work であり、取得したり他に伝達したりするのこのできない恩恵 gift である。信仰はそれ自体、恩寵 grace の一形態である。さらには、それは解放とコミュニケーションと創造性とをもたらす。信仰は一つの現象として単独で取り出すことはできず、信仰する人間の中にのみ見いだせるものである。しかしこの場合でも、信仰は人々によって要求されることができるものではなく、それ自体基本的に信仰者の関心に属するものではない。バールト教授によれば、これが信仰の意味であり、また「信仰のみを通じて」ということの、古典的だが同時に現代的でもある言葉による説明である。

バールト教授と同じように、木越教授は、その「信仰のみと念仏」という講義の導入部で、ジェスイットの修道士フランシスコ・カブラルに言及した。カブラルは1571年に、次のような報告書をローマに書き送っている。「この宗派（浄土真宗）はルターの宗派に似ている。救われるためにしなければならないのは、ただ南無阿弥陀仏と称えることだけである。」そして木越教授の発表は、バールト教授のものと同様、浄土真宗における念仏、専修念仏（ただ念仏）そして信心に関する古典的な教説を明晰な言葉で整理して提示するものだった。木越教授はその講義の中で善導と法然からの伝承を指摘し、法然のようにただ念仏のみを選び取る代わりに、親鸞は本願 Original Vow をたのみ、「ただ念仏のみ」よりもむしろ「ただ信心のみ」の方を好んだこと、また同じように六字の「南無阿弥陀仏」よりも十字の「帰命尽十方無碍光如来」を好んだことを指摘した。そして、その講義を、信者によって生み出された信仰の表明ではなく、如来から与えられたものとしての信心という概念について述べることで締めくくった。こうして浄土真宗の信心とプロテスタント的な信仰概念との明白な類似性が示されたのである。

それに続く二人の講演者の間の短い対話の中で、ルターと親鸞との言葉の引用を通して、これらの類比的概念はさらに展開されたが、しかしまた両者の違いも指摘されたのである。全体の進行は、卓抜した司会者であるミヒャエル・パイ教授によってなされた。

*

翌5月7日金曜日には三つのセッションがあった。「神—阿弥陀—涅槃」、「恩寵—他力、責任—エートス」そして「現代世界における社会倫理の諸問題」である。

最初のセッション「神—阿弥陀—涅槃」では、バーゼル大学のクラウス・オッテ教授と大谷大学の寺川俊昭教授による呼応的な講義があり、ボン大学のハンス・ヴァルデンヘルス教授が司会を務めた。

はじめにオッテ教授が、大谷大学の大河内了義教授との長い友人付き合いに焦点を当てながら、自伝的な紹介から話を始めた。彼はマルチン・ハイデッガー、カール・レーヴィット、カール・ヤスパース、ハンス・ゲオルグ・ガーダマー、ルードルフ・ブルトマン、カール・バルトなどの教授たちのもとで送った二人の研究の歳月

にふれ、とくに彼は京都で大河内教授の先生であった西谷啓治教授がヨーロッパに滞在中の助手として働いた実り豊かな歳月に言及した。その中には、両教授の共同作業による1979年に発刊された『歎異抄』のドイツ語訳も含まれている。そして、オッテ教授は、1999年に親鸞の『唯信鈔文意』を独訳することによって対話の努力を続ける大河内教授を賞賛した。オッテ教授自身の宗教間対話に対する関心が、様々な信仰をもった人々をスイスにある彼の牧師館 rectory に集わせることになったことを述べ、このことを背景に、帰納的解釈学の分野での精力的な取り組みを求め、異文化間における解釈学のための国際言語センターを設立することを主唱した。それからオッテ教授は、神に関するキリスト教神学と浄土真宗における阿弥陀仏の本願への依拠を、無 Nothingness の意味を背景として、どのように考察するかというテーマに話を進めた。カール・バルトやフリッツ・ブリによって注意されたように、その類似性は明らかであり、オッテ教授自身が1988年から取り組んだ両宗教の恩寵 grace の概念についての研究では、キリストのうちにあること（キリスト内存在）についての聖パウロと福音のヨハネによる文章を指摘し（例えば、ピリピ人への手紙２章５～11節、ローマ人への手紙４章17節、ガラテヤ人への手紙２章20節）、このキリストのうちにあるという思想は、無からの創造（*creatio ex nihilo*）の神話とともに、実り豊かな研究分野となるだろうと述べた。

引き続いて同じテーマのもと寺川教授が、「親鸞の如来観」という副題のついた発表を行った。彼の出発点は、釈迦牟尼が真理に目覚めた人となり、法を説く人（如来）となる仏伝であった。釈迦牟尼は「世間の中への如来の顕現（如来の出世）」であるが、これは釈迦牟尼を超越する普遍性をもつ現象である。さらには、根本的な覚りがまた法を説く慈悲としてはたらくのであり、それが大乗のキーポイントである。キリストの中での新しい生命という新約聖書からのオッテ教授の引用の言葉を思い起こさせるけれども、それとは異なった言葉で、寺川教授は真理への目覚めについて「‥真理を根拠として生きる新しい存在となったという喜びの感情によって感動するのである」と語った。親鸞が好んだ十字名号で阿弥陀如来をあらわす「尽十方無碍光」という表現は、無明の闇が破られ、真理の顕現を経験した喜びである。浄土真宗においては、宗教的な目覚めは二人の如来の恩徳 blessing を通して現れる。つまり、釈迦牟尼という名の如来と阿弥陀という名の如来である。だから浄土真宗は「二尊教」と特徴づけることができる。阿弥陀如来は「人格」として理解される傾向が強いが、如来は実際には法 Dharma あるいは恩徳として経験される無限の光明である。

自身の著作がオッテ教授によって引用されたボン大学のハンス・ヴァルデンフェルス教授が、その後行われた討論の司会を務めたが、そこでは上述の要約からもわかるように、二人の講義は多くの点で互いに支持し合うように思われた。

*

５月７日金曜日の午前中に、「恩寵―他力、責任とエートス」というテーマによるもう一組の発表があった。講演者はベルリン大学のクリストフ・ゲシュトリッヒ教授と大谷大学の安冨信哉教授であり、マールブルク大学のクリストフ・エルザス教授がその司会を務めた。

より正確に言えば、ゲシュトリッヒ教授の講義は、「恩寵のキリスト教的理解」と称するもので、それはヨーロッパ教会史における恩寵概念の発展に焦点を当てたものであった。キリスト教における基本的な教義の一つは、人間は原罪と邪悪さによって堕落した存在であるが、恩寵に溢れる神はイエス・キリストを通して人類を救ったということである。それ自身において、そして教会の歴史全体を通じて、恩寵の概念は難題を提起してきた。つまり誰が恩寵を受けるのか。人間は、救済という事実に働きかけることができるのか、また恩寵に値しうるのか。不信仰な人々は恩寵を得ることができるのか。こういった複雑な問題は、選択、自由意志、予定説、義認といった議論を呼びおこす問題を含んでおり、そのためにキリスト教は多くの派に分かれることになった、とゲシュトリッヒ教授は語った。カトリックでは、恩寵には多くの形態があり、その主な形態は「被造的恩寵」と「創造されたものでない恩寵」、すなわち人間自身の恩寵に達する潜勢的能力と、神の至上の恩寵である。両方の恩寵の形態が働くのだが、プロテスタントでは、人間は自分自身の救済に働きかける自由意志を持たない。プロテスタントの信者は善い行いを通じて恩寵に到達（を獲得）することにこだわらず、神の「恩寵のみ sola gratia」に救済を委ねるのである。ゲシュトリッヒ教授は、信仰のみによる義認はキリスト教教義の中心であるばかりでなく、倫理においても中心となると主張して、恩寵に関する彼の発題を終えた。

大谷大学の安冨信哉教授は、浄土真宗において要求される主題の提示を行うばかりでなく、キリスト教との類似性を示唆することで、話の穂を継いだ。彼は始めに日本語にはグレース（恩寵）にぴったりと当てはまる言葉がないこと、そして親鸞の著作には、「恩寵」それ自体を意味するような語がないということを述べた。それから安冨教授は「恩」という概念を、特殊な仏教概念としてのみでなく、日本文化それ自体の中で重要な観念とし

て紹介した。この場合も、ルース・ベネディクトも気づいていたように、「恩」を西洋の言葉に正確に翻訳することはできない。「恩」を表す漢字は、「因 cause」と「心 mind」の合成であり、恩を知るということは現在の状態をもたらした原因を深く心に銘することである。「恩」は「知恩」(恩への目覚め)、「報恩」(恩に報いること)そして「謝恩」(恩に対する感謝)といった熟語の中でさらに明解になる。安冨教授は思考の糧として以下のような仮説を提起した。

プロテスタント	:恩寵(Grace)	責任(Responsibility)	気質(Ethos)
真宗	:知恩	報恩	謝恩

中国における恩は、恩を付与する者が誰であるかによって様々な種類に細かく分かれる。つまり師であるか、王であるか、両親であるかなどによるのである。しかし親鸞にとっては、仏恩が第一に位置し、しばしば仏陀の恩徳 Buddha's benevolence と翻訳される。それゆえにこそ、カール・バルトが『教会教義学』の中で、浄土真宗が「恩寵の宗教 religion of grace」であることを強調したのである。仏恩が引き起こす要求が「報恩」であり、しかも「報恩」は、阿弥陀仏へ向かう垂直の方向性に加えて、他の衆生へ向かう水平の方向性も有しているのである。「謝恩」(感謝)はおそらく浄土真宗の、ウェーバー的用法における「気質(エートス)」としてもっともよく理解されるものであり、それは、ミヒャエル・パイ教授の論文のなかでも述べられている通りである。しかしこの感謝は親鸞においては懺悔 repentence と一対になっている。だから安冨教授は、真宗の二つの対照的な基本的態度を提示する。つまり、「慶ばしい哉」と「悲しい哉」である。後になって、真宗の発展の中で、この感謝—懺悔の二分法に加えて、従順—批判が浄土真宗の気質(エートス)にとって重要になってきた。この〔従順—批判という〕テーマについては、別の機会に、感謝—懺悔の二分法と同様の構築的な仕方で、安冨教授によって詳しく論じられることになるはずである。

他の研究発表後の討論と同じように、ゲシュトリッヒ教授と安冨教授の討論も(エルザス教授の言によれば)すばらしく節度あるものだった。しかし時間のために意見交換による成果は限られたものとなった。

*

5月7日金曜日の午後に、さらにもう一組の研究発表と討論があった。「現代における社会倫理学の問題」に関するもので、マールブルク大学のヴォルフガング・ネーテフェル教授と大谷大学の宮下晴輝教授が講演者となり、ジークフリート・カイル教授が司会を務めた。

ネーテフェル教授の研究発表のより詳しい論題は、「グローバル化時代の神学的社会倫理学」であった。彼ははじめに、キリスト教が個人の救済として出発しながら、世界を伝道地と主張するような伝道宗教になったという逆説について述べた。しかし20世紀の後半には、この図式は再び変わった。生態学的危機や難民の氾濫といった現代の現象が新しい問題を提起し、世界は関係のネットワークへと変わってしまっている。歴史的事象 a thing of history としての世界は「宇宙船地球号」と呼ばれる概念によって取って代わられているのである。例えば、二酸化炭素排出による新しいエネルギー資源の需要によって、世界中に広がるさまざまな非政府機関が連携してきている。情報工学とインターネットによって新しい形態の意識と行動が生まれてきていることは、また別の例である。伝統的な西洋の意味での進歩という考えは、もはや自明のものではなくなっている。宗教—キリスト教やその他のイスラム教、浄土教といった世界宗教—の役割が引き継がれねばならない。ネーテフェル教授の発表は、答えよりも多くの問題を慎重に提起しながら、「世界平和の鍵は、すべての人々の相互の尊敬と、共感と愛とに基づいた、内面的な自由にかかっている」というダライ・ラマの言葉を引用し、そのような態度が吟味されなければならない、と締めくくられた。

宮下教授の研究発表の講題は「仏教の身体論:仏教倫理学の基礎づけのための一視点」というものであった。その中で、宮下教授は仏教における身体 *kāya* と人間の行為の類比に基づいた考えを提示した。仏伝によればゴータマ・シッダールタが宮廷で見た四つの現象のうちの三つであるところの老・病・死の問題が出発点であり、それらの問題は「衆生 *sattva*」(有機体や感覚をもった存在を表す仏教語)に属している。老・病・死は苦悩の原因であり、私たちがそれを苦として経験するのは、人間が身体をもって存在しているからである。有名な四聖諦(苦、集、滅、道)においては、原因は「渇愛 *tṛṣṇā*」(文字通りには「渇き」)に基づいて「縁起」しているのだが、「渇愛」はまた自我に関する誤った知覚から成っている。根本的な誤りは、「これは私のものである」「これは私である」「これが私の我である」といった文句で示される。この真理は、すべて作られたものは無常であり、苦につながるのであり、したがって「法 *dharma*」(教法あるいは真実)は無我である。例えば、ブッダの形態としての身体は存在することを止めても、ブッダの法としての身体(法身 *dharma-kāya*)は存在することを止めることは決してない。さらに我々は身体をもって生きており、何らかの道徳的規範を満たす義務を負っている。「倫理 ethics」がギリシア語で習慣を意味するように、仏教でそれに相当する言葉である「戒 *sīla*」もまた習慣である。しかしながら実際は、人間は道徳的規範に忠実

に従って生きてはいないし、そのことが苦悩の原因ともなる。しかしとくに大乗仏教では、苦から生じた悲しみはすべての生き物に向けられた慈悲に変容する。そこに菩薩の誓願につながる菩薩の役割の意味もあり、それだからブッダに成るという誓願は、菩薩のみに限られたものでなくなるのである。——要約すると、宮下教授は、仏教徒にとって悪業 evil karma が人間存在を構成しているのだが、人間として悪業を超えることは可能であると述べた。覚えておくべき最も大切なことは、私たちは自ら責任あるものだということである。また現代社会における大きな問題は人間次第である。——宮下教授によれば、このような真宗の理解は、ネーテフェル教授が先に引用したダライ・ラマの仏教理解と基本的に一致する。

二人の講演の後、司会のジークフリート・カイル教授が首尾よく討論を進行し、そこで「論争者 contenders」という言葉がそのより深い意味にまで掘り下げられることになった。

*

5月8日土曜日は、上述の「勤行（読経）」で幕を開けた。大谷大学学長の訓覇曄雄教授が導師を務めたこの印象深い儀式は、日本からの使節団の評価を高めた。それはまた、当日設定されていた、より実践的な二つのテーマへの道ならしをするものであった。つまり「精神の道しるべ」と「祈り／瞑想」である。

最初のテーマである「精神の道しるべ」をめぐる討論は、マールブルク大学のゲルハルト・マルセル・マルチン教授によって幕が切って落とされた。

マルチン教授は、ヨーロッパの教会史における精神的指導の役割を、歴史的な視点から簡略に素描したり、現状を解説したりする代わりに、むしろ非常に有益なモデルを導入するという道を選んだ。つまり(A)誰が、(B)何時、(C)どのような場所で、(D)どのように／何を／どんな仕方で、(E)どんな「目標」に導くのかを知るということである。

神秘宗教における秘儀伝授者 mystagogue や、典礼学者 liturgist、説教者 priest、教理問答の教師 catechist、宗教の教師、精神的助言者といった宗教的専門家たち(A)は、みなそれぞれ異なった役割や、時間や場所や知識を持っていることだろう。しかし宗教的専門家の役割のほとんどは専門的なものではないし、その役割のなかには専門家でない人たちが執り行うことができるものもある。さらには、プロテスタント教会における教会区司祭 vicar のような人物はいくつもの役割を担っている。例えば、教会のミサの指揮者として、若者の教師として、教区で困っている人たちの精神的助言者として。これに本を読んだり、夢を解読したり、瞑想したりすることも精神的指導としての役割であり、その活動領域は幅広く、限定されるべきものではないことは明白であろう。教化の目標に関して言えば、それは「神の中の生 life in God」にのみに限定されるべきでなく、世俗の生活も含むべきである。（真宗の精神生活の知識からすれば、このモデルの枠組みを広く適用させることで、このモデルがプロテスタント諸派におけると同様真宗にも応用可能となっていることは明らかだろう。）

次に講演を行ったのは京都の真宗大谷派教学研究所元所長であった児玉保先生であり、その発表論文は「仏教信徒の基本的姿勢」という題であった。彼は初めに、師と弟子との区別ははっきりと固定されたものではない、と強調した。師と弟子は仏道を共に歩むのである。（ルターの「すべての信者が僧職にあずかる」を思い起こさせる。）真宗では「真宗同朋会運動（大谷派によって1969年に創始された、真宗における同朋推進協会）」が、俗人 ordinary person に属する信仰の一例である。こうした基本的姿勢は世俗主義と自分自身のためにのみ覚りを求めることとの両方を否定することを意味している。要点を例証するために、児玉先生は真宗同朋会運動で用いられた『観無量寿経』の中の韋提希夫人と頻婆娑羅王と阿闍世太子の物語に注意するよう促した。

マールブルク大学の教授であり、ドイツ人の比丘でもある司会のエックハルト・バンゲルト教授は、その後の討論を手際よく導いた。

*

最後の組の討論のテーマは「祈り／瞑想」と広く題したもので、討論参加者はマールブルク大学のディートリッヒ・コルシュ教授と京都にある龍谷大学の高田信良教授の二人で、マールブルク大学のヨゼフ・フライターク教授が司会を務めた。

コルシュ教授の発表論文は「キリスト者の祈りの基本的特徴」と題するもので、彼はキリスト教における神と人間の基本的関係を描き出すために、イエス・キリストが弟子たちに教えた「主の祈り The Lord's Prayer」を選んだ。この祈りにおいて、人間は神に語りかけるのであるが、それは自ら関係をうち立てることによってではなく、一つの人格的存在つまり「父」として、またこの世の外側にいます神として語りかけられている神のうちにすでに存在しているという関係に参入することによって語りかけるのである。神の王国は人間の救済であり、未来に属している。それでも、多くの要求は精神的なものであるだけでなく物質的なものでもある。主の祈りは、神はイエス・キリストとともにいるのと同じように人間とともにいます（インマヌエル）ということに生を賭けることを意味する。つまりその関係はイエスが神に対し

て持っていたのと同じ関係である、

「キリスト教における神への語りかけと真宗における(阿弥陀仏を)聞くこと」と題する講義の中で高田教授が述べたところによれば、真宗においては、神に要求するという観念は全く縁遠いものである。

シンポジウムの最後の演壇討論でバールト教授が繰り返し用いることになる言葉遣いであるが、「似て非なる similar, but different」という言葉を用いて、高田教授はキリスト教と真宗の基本的な二つの立場を分析し、本願とは人間のなかに信心を呼びおこす阿弥陀仏の衆生に対する慈悲であるという考えを示した。高田教授は、浄土教で最もよく知られた譬えである、善導の「二河の白道」の譬えの中に、人間の条件の基本的な比喩を見出した。その譬えの中では、旅人が東の岸において釈迦仏の声が狭い道を行くように彼を励ますのを「聞き」、西の岸から阿弥陀仏が彼を呼ぶのを「聞く」のである。——こうして高田教授は、二日前に寺川教授が紹介した「二尊教」という観念についての一連の発表を締めくくったのである。

*

まとめ

この短いレポートは、シンポジウムの聴講者としては不足している私の力量を精一杯に尽くして書き上げたものだが、私は次のように結論づけたい。講義の中には、二つの宗教の神学的立場について述べられたものもあったが、さらに歩を進めて、二つの宗教が出会える可能な点を提案した講義もあった。対話のためには、両方のタイプが必要であり意味がある。なぜなら、自分たちがどこにいるかを理解するためには、予め用語を概念化し定義付けておかなければならず、そうすることで、その後の接触や対話は堅固な基礎の上に基づくことができるからである。勿論、二つの宗教が「併合 merge」すべきだというのでは決してないが、しかし、必ずや、両者は対話から利益を得るであろうし、将来取り組むべき共同企画があることを期待している。そのためのすばらしい予備作業がマールブルクで行われたのである。

(本報告は、1999年6月14日付けの英文レポートの全訳である。要旨はすでに『真宗』1999年8月号に掲載されている。本報告の発表が遅れていまったことを誌面かりて筆者にお詫びしたい。英文も何らかの形で公表したいと思う。文責はすべて加来雄之にある。)

◇

これまで本シンポジウムについては以下のような報告がなされている。

・児玉曉洋「浄土真宗とキリスト教が対論—R・オットー国際シンポジウムに参加して」(『朝日新聞』1999年6月1日夕刊)
・「ルドルフ・オットー国際シンポジウム報告」(『大谷大学広報』一三六号、1999年7月10日)
・「ルドルフ・オットー国際シンポジウム報告」(『大谷大学通信』49号、1999年7月26日発行)
・エスベン・アンドレアッセン「第3回国際ルードルフ・オットー　シンポジウム聴講レポート(要旨)」(『真宗』1999年8月号、1999年8月10日発行)
・加来雄之「マールブルクの印象」(同上)
・木越康「「第Ⅲ回ルドルフ・オットー・シンポジウム」に参加して」(『親鸞教学』74号、1999年9月30日発行)
・大城弘子「第三回ルードルフ・オットー国際シンポジウムに参加して」(『真宗大谷派　坊守会連盟通信』第10号、1999年12月1日発行)
・大河内了義「浄土真宗とプロテスタント神学の出会い—第三回ルードルフ・オットー・シンポジオン、その背景と展開—」(『大谷学報』第78巻第3号、2000年1月31日発行)

真宗総合研究所彙報　1998.4-1999.3

■研究所委員会

5月7日(木) 12：10～　博綜館5階第3会議室
議　題　①客員研究員の認定について
　　②その他
10月29日(木) 12：10～　博綜館5階第3会議室
議　題　①1999年度「一般研究」選考について
　　②その他
1月28日(木) 16：00～　博綜館5階第5会議室
議　題　①客員研究員の認定について
　　②その他
3月31日(水) 14：00～　博綜館5階第3会議室
議　題　①1999年度「指定研究」について
　　②研究所出版物について
　　③その他

＊研究班庶務連絡会議

9月24日(木) 12：10～　博綜館5階小会議室3
議　題　真宗総合研究所LANについて

■「指定研究」研究会

○「指定研究」国際仏教研究班

＊曽我量深の翻訳に向けて (11)～(18)

講　師　Jan Van Bragt氏（南山大学名誉教授）
(11) 4月23日(木) 17：00～　博綜館5階第5会議室
(12) 5月22日(金) 17：00～　博綜館5階第5会議室
(13) 6月19日(金) 16：00～　博綜館5階第5会議室
(14) 7月17日(金) 16：00～　博綜館5階第5会議室
(15) 9月18日(金) 16：00～　博綜館5階第5会議室
(16) 10月9日(金) 16：00～　1号館2階
　　第5研究室分室1
(17) 11月6日(金) 16：00～　博綜館5階第5会議室
(18) 12月18日(金) 14：30～　博綜館5階第5会議室

＊清沢満之の翻訳に向けて (3)～(11)

講　師　Mark L. Blum氏（アメリカ　フロリダ
　　アトランティック大学教授）
(3) 5月15日(金) 14：30～　博綜館5階第5会議室
(4) 6月12日(金) 14：30～　博綜館5階第5会議室
(5) 7月16日(木) 14：30～　博綜館5階第5会議室
(6) 9月17日(木) 14：30～　博綜館5階第5会議室
(7) 10月15日(木) 14：30～　博綜館5階第5会議室
(8) 11月12日(木) 14：30～　博綜館5階第5会議室
(9) 12月17日(木) 14：30～　博綜館5階第5会議室
(10) 1月14日(木) 14：30～　博綜館5階第5会議室
(11) 3月9日(火) 13：00～　博綜館5階第5会議室

＊安田理深の翻訳に向けて

講　師　Paul Watt氏（アメリカ　デポー大学教授）
(1) 6月23日(火) 16：00～　博綜館5階第5会議室
(2) 6月24日(水) 14：30～　博綜館5階第5会議室

＊記念講演「POPULAR BUDDHISM IN JAPAN
　　Shin Buddhist Religion and Culture」

講　師　Esben Andreasen氏
　　（元コペンハーゲン大学講師）
7月3日(金) 17：00～　博綜館5階第5会議室

＊『唯信鈔文意』の翻訳研究一泊研究会

7月21日(火) 13：00～7月22日(水)　京都ウオジ苑

＊『親鸞の仏教史観』の翻訳研究一泊研究会

7月28日(火) 13：00～7月29日(水)
　　ホテル本能寺会館
講　師　Jan Van Bragt氏（南山大学名誉教授）

＊『唯信鈔文意』の翻訳研究一泊研究会

9月28日(月) 16：00～9月29日(火)　京都ウオジ苑

＊『我信念』（清沢満之）の翻訳研究一泊研究会

2月17日(水) 13：00～2月18日(木)　ホテル杉長
講　師　Mark L. Blum氏（アメリカ　フロリダ
　　アトランティック大学教授）

■学会参加

○「指定研究」大谷大学近代史研究班

＊期　日　5月12日(火)
出張先　京都大学総合博物館
出張者　御手洗隆明（研究補助員）
　　狭間　芳樹（研究補助員）
要　務　全国大学史資料協議会
　　西日本部会1998年度総会・研究会出席

＊期　日　7月2日(木)
出張先　東京
出張者　御手洗隆明（研究補助員）
要　務　全国大学史資料協議会　東日本部会研究会出席

＊期　間　9月30日(水)～10月2日(金)
出張先　愛媛県松山市　愛媛大学、松山東雲学園
出張者　宮崎　健司（研究員）
　　御手洗隆明（研究補助員）
要　務　全国大学史資料協議会1998年度総会
　　ならびに全国研究会出席

＊期　日　12月18日(金)
出張先　京都　龍谷大学大宮学舎
出張者　御手洗隆明（研究補助員）
　　狭間　芳樹（研究補助員）

藤枝　真（研究補助員）
要　務　全国大学史資料協議会
西日本部会第3回研究会出席

○「指定研究」国際仏教研究班

*期　間　5月1日(金)～5月6日(水)
出張先　オランダ　ライデン大学
出張者　Robert F. Rhodes（研究員）
要　務　第4回国際法華経学会出席

*期　間　11月7日(土)～11月9日(月)
出張先　韓国（ソウル）　東国大学
出張者　延塚　知道（研究員）
鄭　早苗（研究員）
要　務　東国大学との共同研究協議会出席

*期　間　1月17日(日)～1月23日(土)
出張先　台湾（台北市）
出張者　宮下　晴輝（所長）
要　務　Pacific Neighborhood Consortium 学会発表
及び資料収集

*期　間　3月10日(水)～3月14日(日)
出張先　アメリカ（ボストン、N.Y.等）
出張者　Robert F. Rhodes（研究員）
要　務　AAS 学会（Association for Asian Studies）出席

○「指定研究」西蔵文献研究班

*期　間　7月24日(金)～8月26日(水)
出張先　アメリカ（ブルーミングトン、ニューヨーク）
カナダ（カルガリー）
出張者　白館　戒雲（研究員）
要　務　第8回国際チベット学会発表及び
コロンビア大学・カルガリー大学訪問調査

*期　間　7月24日(金)～8月1日(土)
出張先　アメリカ　インディアナ大学
出張者　今枝　由郎（嘱託研究員）
要　務　第8回国際チベット学会参加及び
チベット語システム（TLK）の紹介

*期　日　10月17日(土)
出張先　東京　駒沢大学
出張者　三宅伸一郎（研究補助員）
広浜　哲生（研究補助員）
要　務　第46回日本西蔵学会学術大会における
「Tibetan Language Kit for Macintosh」の
新ヴァージョンの紹介

■出張／調査派遣

○研究所

*期　間　12月10日(木)～12月11日(金)
出張先　東京　東洋大学井上円了記念学術センター、
財団法人　仏教伝道協会
出張者　宮下　晴輝（所長）
加来　雄之（主事）
Bazarow Andrew Alexander（客員研究員）
要　務　井上円了記念学術センター、
仏教伝道協会との話し合い

*期　日　2月26日(金)
出張先　愛知県　西方寺（清沢満之自坊）
出張者　宮下　晴輝（所長）
加来　雄之（主事）
要　務　西方寺所蔵清沢満之蔵書目録作成の終了の報
告と今後の事業協力体制確立の話し合い

*期　日　3月15日(月)
出張先　愛知県　西方寺（清沢満之自坊）
出張者　宮下　晴輝（所長）
加来　雄之（主事）
片岡　裕（文学部助教授）
柴田みゆき（本学非常勤講師）
要　務　西方寺蔵清沢満之関係史料の取り扱いについ
ての確認書の調印及び西方寺資料撮影の事前
調査

○「指定研究」大谷大学近代史研究班

*期　間　11月21日(土)～11月22日(日)
出張先　東京　明治大学
出張者　御手洗隆明（研究補助員）
要　務　明治大学歴史展視察及び資料収集

*期　間　12月4日(金)～5日(土)
出張先　愛知県　祐誓寺
（大谷大学第8代学長住田智見自坊）
出張者　宮崎　健司（研究員）
要　務　祐誓寺の研究調査

*期　間　3月30日(火)～31日(水)
出張先　東京　東京都公文書館、国立国会図書館等
出張者　御手洗隆明（研究補助員）
狭間　芳樹（研究補助員）
要　務　真宗大学（東京巣鴨時代）史料の調査収集

○「指定研究」国際仏教研究班

*期　間　7月25日(土)～8月9日(日)
出張先　スイス（チューリヒ）
ドイツ（ハイデルベルク、ルクセンブルク）
出張者　大河内了義（嘱託研究員）
要　務　第3回ルードルフ・オットー・シンポジウム
の準備
（『唯信鈔文意』のドイツ語への翻訳作業）

*期　間　8月18日(火)～8月24日(月)
出張先　ドイツ（マールブルク他）

出張者　加来　雄之（主事）
要　務　第3回ルードルフ・オットー・シンポジウムの準備ならびに資料収集
＊期　間　1月14日(木)～1月23日(土)
出張先　ドイツ　マールブルク大学
出張者　箕浦　恵了（研究員）
　　木越　康（研究員）
要　務　第3回ルードルフ・オットー・シンポジウムの準備ならびに資料収集
＊期　日　3月11日(木)
出張先　東京　財団法人　仏教伝道協会
出張者　安冨　信哉（研究員）
要　務　嘱託研究員 Alfred Bloom 博士の仏教伝道文化賞贈呈式への出席
＊期　間　3月21日(日)～3月27日(土)
出張先　アメリカ　ハーバード大学ライシャワー研究所　マサチューセッツ工科大学　他
出張者　加来　雄之（主事）
　　Robert F. Rhodes（研究員）
要　務　ハーバード大学ライシャワー研究所との学術交流に向けての話し合いならびにその他の研究所等の視察調査

○「指定研究」西蔵文献研究班
＊期　間　7月29日(水)～8月1日(土)
出張先　在住地（東京）から大谷大学真宗総合研究所
出張者　福田　洋一（嘱託研究員）
要　務　「Tibetan Language Kit」関連の Web Page 開設準備
＊期　間　11月19日(木)～11月21日(土)
出張先　在住地（東京）から大谷大学真宗総合研究所
出張者　福田　洋一（嘱託研究員）
要　務　チベット語システムの開発と文献データベース化についての検討ならびに打ち合わせ等
＊期　間　3月16日(火)～3月18日(木)
出張先　在住地（東京）から大谷大学真宗総合研究所
出張者　福田　洋一（嘱託研究員）
要　務　北京版西蔵大蔵経総目録電子版フォーマット作成ならびに実用化に向けての打ち合わせ等

○「指定研究」蓮如研究班
＊期　間　2月15日(月)～2月16日(火)
出張先　奈良、大阪方面
　　蓮如上人ゆかりの史跡寺院9箇寺
　　(金台寺、本善寺、願行寺、立興寺、慈願寺、顕証寺、定専坊、妙円寺、教行寺)
出張者　一楽　真（研究員）
　　山田　恵文（研究補助員）
　　鶴見　晃（研究補助員）
　　橋田　尊光（研究補助員）
　　竹原　了珠（アルバイト）
要　務　蓮如上人ゆかりの史跡踏査

○「一般研究」共同研究小野班
＊期　間　4月28日(火)～4月29日(水)
出張先　愛知県　西方寺（清沢満之自坊）
出張者　名畑直日児（研究補助員）
要　務　西方寺の資料調査
＊期　間　5月7日(木)～5月9日(土)
出張先　愛知県　西方寺（清沢満之自坊）
出張者　名畑直日児（研究補助員）
　　鶴見　晃（アルバイト）
　　野中　義文（アルバイト）
要　務　西方寺の資料調査
＊期　間　6月6日(土)～6月7日(日)
出張先　愛知県　西方寺（清沢満之自坊）
出張者　名畑直日児（研究補助員）
　　佐々木　大（アルバイト）
要　務　西方寺の資料調査
＊期　日　10月17日(土)
出張先　愛知県　西方寺（清沢満之自坊）
出張者　一楽　真（研究員）
要　務　西方寺の資料調査
＊期　間　10月24日(土)～10月25日(日)
出張先　愛知県　西方寺（清沢満之自坊）
出張者　名畑直日児（研究補助員）
　　佐々木　大（アルバイト）
　　渋谷　行成（アルバイト）
要　務　西方寺の資料調査
＊期　間　11月28日(土)～11月29日(日)
出張先　愛知県　西方寺（清沢満之自坊）
出張者　加来　雄之（主事）
　　一楽　真（研究員）
要　務　西方寺との話し合い
＊期　間　2月8日(月)～2月10日(水)
出張先　愛知県　西方寺（清沢満之自坊）
出張者　名畑直日児（研究補助員）
　　三浦　統（アルバイト）
　　佐々木　大（アルバイト）
要　務　西方寺蔵清沢満之蔵書の調査ならびにデジタル化

○「一般研究」個人研究鄭班
＊期　間　12月18日(金)～12月20日(日)
出張先　韓国　全羅南道昇州郡
出張者　鄭　早苗（研究員）

要　務　韓国全南地方の龍に関する固有信仰の研究調査
＊期　間　3月8日(月)～3月13日(土)・3月19日(金)～3月25日(木)
出張先　韓国　江原道地方（江陵、原州等）・慶尚北道地方（釜山、慶州、大邱、金泉、鶏龍山等）
出張者　鄭　　早苗（研究員）
要　務　韓国　江原道、慶尚北道の両地方の龍に関する固有信仰の研究調査

■人事

＊1998年4月1日付を以て、加来雄之助教授が研究所主事に就任した。
＊1998年10月1日付を以て、研究所所長が友田孝興教授から宮下晴輝助教授に交替した。

■客員研究員

＊韓　麗娟（Han Li Juan）
国籍　中国
現職　首都師範大学外国語学院日本語学部助教授
研究期間　1998年4月1日から1999年3月31日
研究課題　「日本言語および日本近代文学の研究」
指導教員　河内昭円教授

＊黄　敏枝（Huang Min Chih）
国籍　台湾
現職　国立清華大学歴史所教授
研究期間　1998年4月1日から1998年4月30日
研究課題　「台湾最近二十年の経済発展と仏教寺院の経済的経営」
指導教員　竺沙雅章教授

＊Volker Zotz
国籍　オーストリア
研究期間　1998年4月1日から1998年6月30日
研究課題　「近代真宗思想の研究」
指導教員　箕浦恵了教授・寺川俊昭教授

＊Paul Watt
国籍　USA
現職　デポー大学教授
研究期間　1998年6月1日より1998年6月30日
研究課題　「Religion and Society in Japan」
共同研究者　安冨信哉教授

＊Bazarow Andrew Alexander
国籍　ロシア
現職　ロシア科学アカデミー、モンゴル・チベット仏教研究所研究員
研究期間　1998年9月30日より1998年12月30日
研究課題　「仏教研究における国際的交流」
指導教授　宮下晴輝助教授

研　究　所　報　第 37 号

2000年 3 月28日　発行

編集発行　大谷大学真宗総合研究所

〒602-0802　京都市上京区寺町通今出川上ル二丁目鶴山町 8 番地

Tel. 075-212-5500　Fax. 075-212-5501